

木船重昭氏著『源氏物語の研究』

森 一 郎

自己の魂の憂悶を紫式部日記との出会いによって感められた木船氏は、紫式部の精神の孤独を「おいらけもの意識・心情」としてとらえられた。そこには魂の出会いによる直観的作用がおそらくはたらいていられたものと推察する。氏はそれを語学的・文法的な解釈、用例実証によって論考され、「おいらけもの」を、「紫式部の切実な魂の嘆き・悩み・呻きが吐き出させずにはおかなかったことば、すなわち、紫式部の造語である、と考えるほうが妥当であろう。」との深い考察に達せられたのであった。この第一編は上下に分たれ、下は源氏物語へのおいらけもの意識・心情の投影の追究で、その意識の深化を成立過程の問題とも連関させつつ考察された。女性の命題についての源氏物語の本質に迫る示唆多き力作であり、鋭い直観と丹念な論証に貫ぬかれた源氏物語論となっている。

この第一編のユニークさは、氏の精神の紫式部のそれへの対面という、文学研究にとって第一義的な、まことに精神的な風土から生まれた。この第一編はおそらく木船氏にとって忘れがたい永遠的研究のふるさととなるであろう。氏の研究のいわば序説なのである。

木船氏はその後実に精力的に論文を発表された。第二編「源氏物

語年紀考」は源氏物語研究上の問題点への切り込みであるが、氏はそこで卓抜な論理を展開された。「第一部年紀考」でたとえば、「年齢操作は、作者のケアレス・ミスではなくて、作者のケアフル・トリックだ、と見るほうが、真相に近いであろう」という論考はあざやかであったし、年紀を、物語の展開の動態的位相において考察する視点の卓抜さに共感と尊敬の感を深くするものである。「第二部年紀考」では、たとえば横笛・鈴虫・夕霧三帖の年次一年間という説によって光源氏の五十賀のなかつたゆえんを明らかにされたあたり、発表当時大変感銘を受けたことを今も記憶している。氏がそれを「奥入」に学んでいられることにも感銘を受ける。光源氏の五十賀を描かなかったことは別の視点からも説明できるであろうが、氏の説はそれらに比しても貴重と思う。

第三編に移ろう。「かがやく日の宮」の新見も学界を刺激しているが、わたくしも氏の立てられた設問を考えさせていただくよろこびを持ちたい。「世に類なしと見奉り給ひ」の主語は光源氏ではあるまいか。この段落は光源氏の藤壺思慕に貫ぬいていて、「こよなう心よせ聞え給へれば」というのが少し前にある。通説の帝が主語

では敬意が軽いと考えられる「見奉り給ひ」の「給ひ」のことも、源氏には「自ら濁り見奉る」の箇所では尊敬語もないぐらいで、源氏が主語なら問題はないであろう。この部分の直前は「弘徽殿の女御、……」とあるけれども、それは源氏の藤壺思慕ゆえに源氏が憎いという内容である。すなわち、源氏の藤壺思慕を、弘徽殿女御の心情の側から浮かびあがらせたものと読むべきである。つまり源氏が藤壺を思慕する「主語」が「内容的には」「こよなう心よせ聞え給へれば」からつづいているのである。「世に類なしと見奉り給ひ」というのが「幼心地」にしてはませているが、七つの年に「今よりなまめかしう恥かしげにおはすれば、いとをかしううち解けぬ遊びぐさ、に、誰も誰も思ひ聞え給へり」とあったし、「年月に添へて」とあるようにその後何年かたち、十二の元服も近い年頃と見られるから別に源氏の女性批評として不自然ではない。「名高うおはする宮」は「先帝の四の宮の、御容貌すぐれ給へる聞え高くおはします」とあったように藤壺宮のことである。さて次に「なほにははしきは……世の人光君と聞ゆ」とあるようにここは光源氏のことをいうのが主旨なのである。女性の最高の美人藤壺宮よりもまさるといふのだ。最高である。「藤壺ならび給ひて……」はつけたしで、文章としては「世の人光君と聞ゆ」と「かがやく日の宮と聞ゆ」と対をなしているが、桐壺巻の後半が「源氏の君」を描くことを主旨としていることを忘れてはならない。これもその例外ではあるまい。藤壺は「なほにははしきは……」と源氏の君を讚美する主旨のために使われたが、もともと「世に類なしと見奉り給ひ、名高うおはする宮の御容貌」である。ただ源氏の君を讚美するだけの具でこの文を終わらせてはとの心理からつけ足された一くだりと見られ

る。北山谿太氏（「源氏物語の新解釈」）は、帝が源氏の君の容貌を、世に類なしと見奉り給うたものと解されるのだが、「理窟をこねるようであるが、帝が、宮の容貌を『世に類なし』と見たことにすると、当然源氏の容貌をば、これに及ばずと見たことになるのではなかるうか。」と疑問を出されている。この点も主語が源氏なら問題はないのである。源氏は藤壺宮を「世に類なし……最高……と見奉り給ひ」、が、その藤壺宮よりも源氏はまさるのだ。当の源氏が自らはおいて藤壺を「世に類なし」と見、その源氏を第三者が「たとへむ方なくうつくしげなる」と見るのは何の矛盾も不自然もない。源氏はその後も「心のうちには、ただ藤壺の御有様を、類なしと思ひ聞えて」（桐壺巻末）いる。なお「かがやく日の宮」は藤壺女御であろう。紅葉賀巻にも「玉光りかがやきて……」とある。

「桐壺院」は力作である。「政治家桐壺院」の機能性という御論はおおむね首肯できる。が、機能적ではあっても非人格的であるかどうか。機能的イコール非人格的という言葉の論理や、近代小説的な統一した人格像を持たないという意味は首肯しているのであるが、たとえば「藤壺との関わりそのものが、本質的には機能적であり、非人格的だ、といってよい」（三四九頁）といった論述はやや勇み足のように思われるがいかかであるう。というより、氏がここのでいわれる「人格性」は程度の差こそあれ、他の作中人物にも求めえないものでなかるうか。

第四編では「琴笛の音にきこえかよひ——藤壺像の修正——」が注目すべき論文である。吉沢義則博士の「源氏随政」の根強い支配下にある通説に対し見事に反論された。が、吉沢説の面白さは残るであろう。

木船氏の論考は単なる訓詁注釈ではない。一語一句の解釈が作品的論的視野の中におさめられ展開しているのである。そこに学問的な新しさ、華麗さがある。これは、わたくしも念願しているところであるのだが、ひそかに思うにこの方法は、華麗なるがゆえの危険性を自覚しなくてはならない。一語一句と作品論の連関はつばにはまったときには快いものがあるが、それだけにつとめてその連関は慎重にし、一語一句に注目し、作品の読みを深めることに徹しなくてはならない。これはむしろわたくしの自戒であるのだが、同学同志の木船氏も共感してくださることと思うのである。

木船氏のこの大著は学界に新風を送り学界を刺激した。氏のオーソドックスな用例実証、本文批判の解釈学が作品論の方法として大いに注目されるところに今日の源氏学界の自己批判があり、この大著の登場の意義も存するであろう。わたくしはこの書評でいささかこの大著と「議論」をすることがあったが、それはおのずから木船氏の論考に刺激され誘発されたのであり、氏の設けた土俵に思わぬのぼらされたのであった。氏の設けた土俵、それはことばをおさえての、本文に即しての立論ということであった。すべての議論、賛成にせよ、反対にせよ、この土俵の上に人々はのぼらなくてはならないのである。それをもたらした氏に心から敬意を表する次第である。

氏の研究方法は古注や本文批判、用例実証に立つての展開であり、きわめてオーソドックスであることもかえって今日の源氏学界では新鮮である。そして大胆に新見を提出されることを尊ぶ。研究に試行錯誤はつきものではなからうか。異説の提出によって新たな説を呼ぶ。弁証法的発展とも言い得よう。読みは総合科学的に深め

られていく。氏もわたくしも決して機械的・直線的・硬直的とならず、柔軟に、あれやこれやと読みをさぐることに今後つとめねばならないのである。互にはげましあい努めていきたいと念じ、氏の研究のいっそうの御発展を心より祈ってペンを擱く。文中、失礼をかえりみず、おおけない言辞をつらねるところのあった点あらためておわびしておく。

(昭和四十四年九月十日刊。A5判、四八八頁。四、五〇〇円、
大学堂刊)

— 甲南女子大学助教授 —